

飼育活動の改善と充実に関する研究
-低学年児童の動物福祉と道徳性を高める手立て-
松本みゆき
(生活科教育領域)

I 論文構成

はじめに

第I章 動物飼育の現状と生命尊重の教育について

第1節 研究の目的

第2節 生命尊重の教育の重要性と動物飼育の価値

第3節 動物飼育の意義と効果

第4節 生命尊重の教育の仮説

第II章 環境において動物福祉を高める手立て

第1節 適切な飼育環境について

第2節 動物飼育の現状調査

第3節 現状調査のまとめと改善点

第III章 授業において動物福祉を高める手立て

第1節 道徳性からみた児童の変容のとりえ

第2節 「出会わせ方」について

第3節 「つづけ方」について

第4節 「離れ方」について

第5節 授業において動物福祉を高める手立ての
まとめ

第IV章 生命尊重の教育の仮説検証

第1節 仮説の理論的検証

第2節 仮説の実践事例からの検証

第3節 共によりよく生きることについて

第4節 研究のまとめ

おわりに

II 研究の目的

生命尊重に関する指導が、平成元年版小学校学習指導要領道徳編に組み込まれて以後、生活科においても学習指導要領の内容(7)で、「動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみを持ち、大切にすることができるようにする」¹⁾ことが明記されている。また、平成20年1月に中教審より出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)」²⁾において「児童を取り巻く環境の変化を考慮し、安全教育を充実することや自然の素晴らしさ、生命の尊さを実感する学習活動を充実する」ことが生活科の改善の基本方針の一つにあげられたように、生命の尊さを実感する学習活動としての動物飼育が担う役割は、より一層重要であると考えられる。

このように、生命を尊重する教育の重要性は、広く認められ、生命尊重をスローガンに掲げる教育が広がってきている。そして、日本全国の多くの小学校で学

校飼育動物が飼育されている。しかし、その活用には学校差が大きい。動物飼育の活用差の大きい原因として、日常の動物管理の問題やアレルギーの問題がよくあげられるが、その他にも、どのように生命を尊重させるのか、何のために動物飼育を行うのか等、動物飼育の教育上の目的が明確でないことも原因ではないかと考える。

そこで、本研究では第I章では生命尊重の教育や動物飼育の意義について再考する。第II、III章では動物飼育についての実態調査や事例分析を行いながら、飼育活動の充実と改善案を提言する。さらに、第IV章では生命尊重の教育について仮説を検証していきながら生命尊重の教育を具体化することを目的とする。

III 研究の概要

1 第I章 動物飼育の現状と生命尊重の教育について

ここでは、生命尊重の教育の重要性と動物飼育の価値について述べた。動物飼育には、生命観、動物観、社会観、自然観、人格形成などの様々な価値がある。また、先行研究の結果、動物飼育によって児童は動物を慈しみ、思いやりが育つことがわかった。しかし、青少年による、動物や家族を傷つける事件のニュースは、後を絶たない。また、身近な人との間のトラブルを解決できず、無関係な人をも巻き込む事件など、生命を軽視するような事件が数多く起きており、生命尊重の教育について再考する必要があると考えた。嶋野道弘は、児童が自他の生命の大切さを実感し、「自分を傷つけない」、「他人を傷つけない」といった基本的な倫理観を踏まえて、生命を尊重した行動がとれるようにすることを、命を大切にすること³⁾としている。

また、近藤卓は、「本当に自分自身のいのちが大切だと思えると、他者を傷つけたりすることもない。他者を傷つけるという行為は、自分のこころをも傷つけてしまうためである」⁴⁾と述べている。

つまり、ただ動物を慈しみ、思いやりをもつだけでなく、自分を大切にして、自分も他人も傷つけない心が育ってこそ生命尊重の教育といえるのではないだろうか。本研究では、生命の尊さを実感する学習活動としての動物飼育という場で、動物を慈しみ思いやりを持つだけでなく、児童にとっての「なかま」を動物飼育の中にかかわり合う友達、動物と捉える。そして、図1のように動物飼育の場で自分をよりよく生き、友達・動物(=なかま)と共に生きながら自他の生命を尊び、共によりよく生きていくことを生命尊重の教育として仮説をたてた。

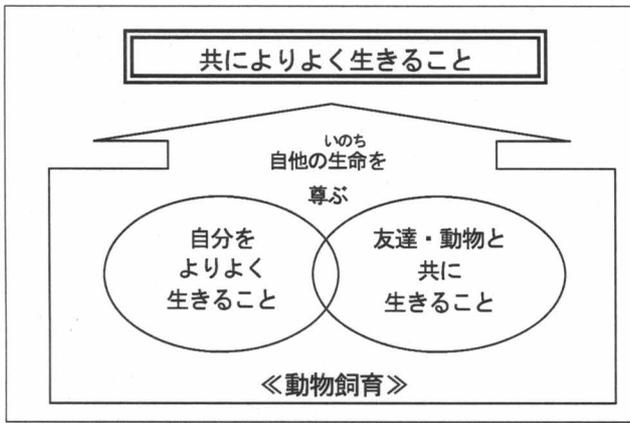


図1 動物飼育における生命尊重の心が育つ仮説図

2 第II章 環境において動物福祉を高める手立て

仮説を検証するため、場としての動物飼育に着目した。学校の動物飼育は、「適切な飼育環境でなければ、望ましい飼育はできない」⁵⁾とされながらも、多くの問題点がある。そこで、動物福祉という考えをもとに、動物飼育における適切な環境について考察した。動物福祉の考え方の一つに、「人による動物の利用を認めたくて、その取り扱いについて倫理的な配慮を求めるもの」がある。また、家畜やペットの福祉の考えとして、「五つの解放」という指標があり、本研究では、以下図2のように、学校で飼育されることの多いウサギを対象として、「五つの必要なもの」をまとめた。

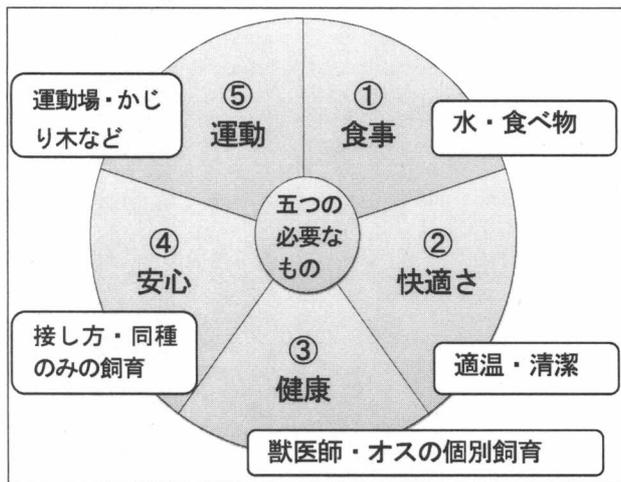


図2 ウサギの「五つの必要なもの」

次に、学校における動物飼育の現状調査を行った。まず、浜松市の生活科に関わる教師 90 人及び愛知県内の動物飼育にかかわる教師 10 人を対象に実態及び知識調査を行った。また、愛知県内の同教師には、インタビュー調査及び現地調査も行った。実態調査では、生活科で扱っている動物は、哺乳類・鳥類ではなく、昆虫やダンゴムシ、ザリガニの扱いが多いことがわかった。また、今度飼いたい哺乳類・鳥類についての質問では、飼いたい動物としてはウサギが多い結果とな

ったが(23人)、多くの教師(46人)が「飼いたくない」と考えていることがわかった。なお、この46人中、28人が現在屋外で哺乳類・鳥類を飼育している学校の教師(うち21人がウサギ飼育)であり、飼育をしている約6割の教師が飼育について否定的であることがわかる。飼いたくない理由としては、「世話が大変だから」「不衛生だから」の理由が多かった。知識・インタビュー・現地調査の結果、「ウサギは半年で大人になる」といったウサギの習性が理解されていないため、頭数が増加している現状であると考えられる。そのため、図2で示した「五つの必要なもの」に、ウサギの習性と、日常の飼育において改善が可能である観点を加えた「五つの必要なものの指標」(表1)を作成し、環境における動物福祉を高める手立てとしてまとめた。

表1 五つの必要なものの指標

	ウサギの習性と改善の観点
① 食事	【ウサギは草食動物である】 ・パンを与えない ・繊維の多い餌を与える ・餌は一日に二回与える ・水入れや食器も洗う
② 快適さ	【ウサギは暑さと湿気に弱い】 ・季節に応じた管理をする ・雨の日は注意する ・U字溝・土管・巣穴を設ける
③ 健康	【ウサギは半年で大人になる】 ・頭数管理を行う ・獣医師との相談体制を整える ・健康チェックシートを活用する
④ 安心	【ウサギにとって人はとても大きい】 ・近づき方・抱き方を指導する機会を設ける ・1部屋に1種類の動物を飼う ・名前を付ける
⑤ 運動	【ウサギの歯はずっと伸びる】 ・かじることができるものを与える ・運動場を設ける

3 第III章 授業において動物福祉を高める手立て

第III章では、動物飼育の各段階について、授業において動物福祉を高める手立てと、児童がどのように変容していくのかをとらえた。動物福祉の考えは、「自分がしてほしいことを相手にしない」⁶⁾対象が、人類から動物にまで広がったものである。また、「動植物などへも心で語りかけることができる」⁷⁾という低学年の道徳性も踏まえ、「優しい心」や「されていやなこととはしない」態度や、「相手の気持ちになる」様子を実践事例から分析した。さらに、動物との出会いの段階を「出会わせ方」、動物を飼育している段階を「つづけ方」、動物と別れる段階を「離れ方」とし、まとめた。

「出合わせ方」は、「子どもの生き物へ対するかかわり方」を変える手立てとして重要である。動物を飼うかどうかの会議や、準備する時間があることによって、動物の喜ぶことを準備するなど、本気で動物を飼う姿が見られた。

「つづけ方」は、継続的な飼育を行う上で重要である。教師が「牛さんの気持ちになって」と課題を提示したり、生活科の他の内容と関連させたりする手立てによって、「寂しくならないように散歩させよう」といった考えになる児童がみられた。また、動物に名前をつけることで深まるかかわりも、つづけ方として重視したい。

「離れ方」では、動物を次の学年に引き継ぐ事例や、牧場へ動物を返す事例から、動物と別れるまでの時間を充実させることで、「何か動物のためにできることはないか」と考える児童が育つことがわかった。また、児童の死についての理解や、葬儀の意味を把握することで、動物の死に児童が遭遇した時にも、機会をとらえて声かけできることがわかった。

実践事例分析では、児童は初め「自分が動物にしたいこと」を考えることが多かったが、手立てにより「次第に」動物の立場になっていった。児童が動物と継続的に深く過ごす時間を保障することや、「出合わせ方」「つづけ方」「離れ方」が児童の動物福祉を高めるために有効であることがわかった。

4 第四章 生命尊重の教育の仮説検証

(1) 仮説の理論的検証

図1で示した「自分をよりよく生き、友達・動物と共に生きること」について理論的に検証した。「自分をよりよく生きること」は、近年自分に肯定的でない児童が多いことから、自尊感情を育てることとした。また、「友達・動物と共に生きること」は、思いやりの基礎を育てることとし、いずれのためにも、「友達とのかかわり」が不可欠であることがわかった(図3)。

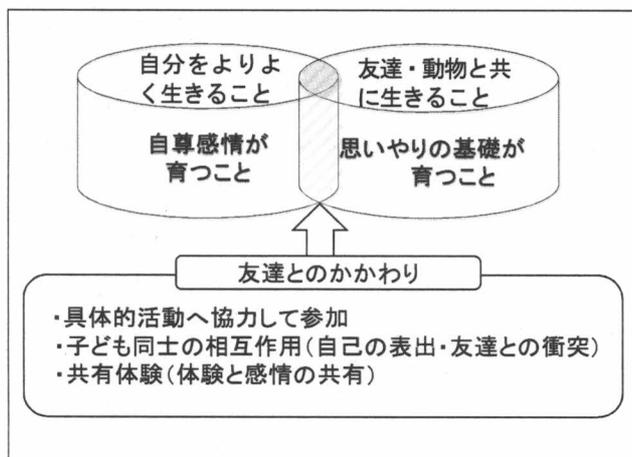


図3 仮説の具体と「友達とのかかわり」の位置付け

(2) 低学年における動物飼育での仮説検証

「友達とのかかわり」は、生活科の内容(8)「伝え合い・交流する活動」や、自分自身への気付きの一つである「集団における自分の存在に気付く」ことに関連すると考えられる。また、低学年の動物飼育の中では、児童同士が協力して世話をする場面が多く、児童同士の協力関係を必然的に生み出す場となるだろう。友達と共に具体的活動に協力して参加し、あるがままの自己を表現したり友達と衝突したりする経験や、共有体験を重ねることが動物飼育においても可能であることがわかる。

「自分をよりよく生きること」は「自分のよさや得意としていることに気付く」ことや、「自分の心身の成長に気付く」ことにつながると考えられる。また、これらの気付きは生活科の究極的な目標である自立への基礎を育てることの一つである「精神的な自立」にもつながるものである。

「友達・動物と共に生きること」は、生活科内容(7)の「生命をもっていることや成長していることに気付く」ことや「生き物への親しみをもち、大切にすることができるようになる」ことに加え、自分の心身の成長について「優しい気持ち、他者への思いやり、我慢する心など、内面的な成長」に気付くことも考えられる。動物飼育の中で、「優しい心」「されていやなことはしない」「相手の気持ちになる」といった児童の変容が見られたことから、思いやりの基礎の面において育まれる要素が多いことがわかる。

(3) 仮説の実践事例からの検証⁸⁾

生活科の実践事例を用い、自分をよりよく生きること、友達・動物と共に生きることとして、①自尊感情が育つこと、②友達とのかかわり、③思いやりの基礎が育つことの3点について検証した。

事例の一つである愛知県豊橋市立S小学校2年生生活科の実践では、研究主題を「友達とのかかわり合いながら、生き物への愛着を深める子の育成」とし、「がんばるよ! 2の1モルちゃんなかよし隊」というモルモットの飼育を行った。めざす子ども像を生き物とのよりよいふれあいや世話の仕方を工夫し、友達と協力して活動できる子、生き物に愛情をもって接する子としている。生き物とのかかわり方の工夫として、以下の2点の手立てをあげている。

ア チームを編成する：5、6人でモルモット一匹の世話をし、自分たちの生き物という意識をもたせる。
イ チームでの活動を重視する：チームでの話し合いや活動の時間と場所を保障することで、よりよいふれあいや世話の仕方を考え、活動できるようにする。

抽出児A児は、1年生時にオタマジャクシ2匹を育てている。水生の生き物以外の飼育経験はなく、事前

の意識調査では「生き物は嫌い」と答え、その理由を「こわいから」としている。優しい気持ちを持つ子だが、控えめな性格である。思いはあるが、相手に伝えられないために、今一歩友達と関われない。A児のモルモットチームはB児、C児、D児、E児の5人で編成されている。遠足でモルモットとのふれあいを楽しんだ感想を交流する中で、モルモットを飼ってみたいという声が出てきた。モルモットを飼いたい児童も多いが、えさやりが怖くて迷っている児童もいる。かまれる心配や、えさの心配、休日の心配が出されたが、「本で調べればわかる。」「(休日の)当番を決めればいいんじゃない?」など、飼うことに意欲的な児童によって解決策が出されている。このかかわり合い前後のA児のワークシートは、以下のように提示されている。

【かかわり合い前のA児の思い】

モルモットを飼いたいです。モルモットはふわふわで気持ちいから飼いたいです。だけどえさやりがこわいです。えさをどうやってあげるの。

飼う場所がわかんない。どうしようと思います。だけどモルモットは飼いたいです。

【かかわり合い後のA児の思い】

モルモットはぜったいぜったい飼いたいのよ。掃除もしてあげるよ。えさもモルモットにあげるよ。休みの日は、班の人が来て掃除をすればいい。

モルモットが飼いたいのかは、かわいくてくすぐったい。かまれるならこわいけど、インターネットで調べればいい。心配は大丈夫だよ。ほとんどの人が調べてくれたから大丈夫。F君は、我慢しているなら、F君は掃除を見ればいいよ。

モルモットはふわふわで気持ちいいよ。

また、飼育の中で問題も発生する。A児のチームでのトラブルは、掃除についてであった。A児について教師の記録には「D児といっしょに『E君が全然掃除を覚えてくれん』と言いに来る。『どうすればいいのかな』とかえす」とある。さらに教師はチームで世話をしながら話し合いをする時間を確保するようにした。トラブルを解決したA児の日記は以下のとおりである。

カリー君のお世話がはやくなったよ。一番早く来るBちゃんがえさ箱をやった、C君がすのこをやった、私が新聞をかえるよ。E君が掃除が知らなかったから教えてあげたよ。
カリーがすごく喜んでくれてうれしいよ。

①控えめな性格であり、相手に自分の思いを伝えられないために、友達と関われない姿のあったA児であったが、実践の様子からは、友達や教師、モルモットに自分の感情を表出し、関わることによって、友達や動物と共に生きていく姿が見られる。

②モルモットを飼うかどうかについてのかかわり合いでは、遠足でモルモットとふれ合った体験を自分なりの表現で伝え合うなかで、問題点を解決し、モルモットを飼うという具体的活動へ向かう姿が見られる。

掃除の問題を解決したA児の日記には、掃除の役割分担が書かれている。また「掃除が知らなかったから教えてあげたよ」からは、チームで協力しようという思いでA児が友達に働きかけており、仲間意識が生まれていることがわかる。同時に、教えてあげることのできた自分にも気付いている姿であると考えられる。また、お世話がはやくなった自分にも気付いている。教えてあげた自分の力や、話し合った結果掃除がうまくいくようになった成功感があると考えられる。

③モルモット飼育が終わった後のA児の発言について、教師のメモには、「前はね、犬や猫が怖かったんだけどね、カリーのおかげで犬や猫がかわいいと思えるようになった」と記されている。カリーのおかげで、という言葉からは、モルモット飼育の充実からくる「優しい心」、その優しい心が他の動物にまで広がっていることがわかる。

以上のように、動物飼育の中で、チーム編成、話し合いや活動の時間の保障によって、友達とかかわりながら、自分をよりよく生き、友達・動物と共に生きる姿が検証できた。

(4) 共によりよく生きることについて

最後に、動物飼育から発展した取組について述べた。社会の一員として生きていくためにも、動物とのふれ合いから思いやりの基礎を育て、高次の愛他行動を育てる必要がある。また、動物飼育で情緒面を十分に発達させた児童は、その成長と共に、大切にされる対象を広げ、行動へと結びつく道徳性をもち、「大切にすること」を深化させていくことができると考える。そして、人と動物の間の様々な問題を解決し、「人と動物の共生に配慮」することのできる社会をつくりだしていきましょう。動物飼育を改善し、充実させることで、人間と幸せに生きる動物と、これからの社会を自立して生きていくことのできる児童が育つことを願う。

【主な参考・引用文献】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」日本教出版 2008年 p.34
- 2) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申) 2008年1月17日 pp.92-93
- 3) 嶋野道弘『生命尊重の心をはぐくむ 低学年』東洋館出版社 2006年 p.32
- 4) 近藤卓『いのちの教育の理論と実践』金子書房 2007年 p.8
- 5) 嶋野道弘「生活科における生命尊重の指導と動物飼育」嶋貝太郎・中川美穂子『学校飼育動物と生命尊重の指導』教育開発研究所 2003年 pp.14-15
- 6) 伊勢田哲治「動物福祉とは何に配慮することか」日本実験動物学会誌編集事務局『実験動物ニュース』第52巻第4号 2003年 pp.73-75
- 7) 文部科学省「小学校学習指導要領解説道徳編」2008年 p.18
- 8) 平成20年度豊橋市立小中学校研究部研究大会生活科部会提案資料 pp.1-12